

書評01

方方 著 飯塚 容・渡辺新一 訳

『武漢日記―封鎖下 60 日の魂の記録』

河出書房新社 / 2020 年 9 月刊 / 320 ページ / 1600 円 + 税
ISBN 978-4-309-20800-8

評者：竹野 豊

京都大学大学院経済学研究科博士後期課程



本書は新型コロナウイルスの影響により中国武漢に封鎖令が出て2日後、旧暦元日である1月25日から3月24日までの全60日間に亘る封鎖下の記録である。武漢在住の小説家方方（ファンファン）が毎夜午前0時前後にブログに投降した日記をまとめたものの日本語訳版である。奇しくも最終日の3月24日は武漢封鎖解除決定通告が出た日であった。本日記は中国でのネット検閲により何度も削除され、しまいには更新不可能となり、後半では知人のアカウントを通して更新を行っていた。本書は世界15か国で出版されているが、中国では出版されていない。最初に世界での発行が決定した時には中国国内からの批判も多くあった。

方方は1955年中国南京で生まれ、2歳時より現在まで武漢で暮らしてきた。現代中国を代表する女性作家の一人であり、社会の底辺で生きる人々の姿を丁寧に描いた小説を多数発表している。かつては湖北省作家協会主席を務めたこともある有名な職業作家である。封鎖当初、著者は文聯（湖北省文学芸術界联合会）の宿舍で1人暮らしをしており、普段は家政婦もいたが封鎖によりその家政婦も往来が出来なくなった。

ブログでは、天気を確認し、友人、家族、知人、インターネットなどから新型コロナ関係の情報を集め、食事調達をどのようにしているのかという、封鎖された武漢での1日の生活を毎日記している。新型コロナという未知のウィル

スに対し、日々状況が変わりゆく中での自分自身の心境を記するとともに、友人知人から得た情報を発信していた。

本書は基本的にはいわゆる一個人としての民生を記した日記なのである。封鎖された街で生活必需品をどのように入手し、日々を過ごしてきたかをブログに毎日投稿した。生活必需品（特に食料）の入手では近隣住民や家族と助け合い協力し合って生活していく、新型コロナに感染していない人の封鎖された武漢での生活は「団体購入、テレビドラマ視聴、就寝、それが今の生活なのだ」という。

情報の中には、身近な人間とその家族が新型コロナを患い死に至る様子や、病院がひっ迫し患者が入院できず死に至る様子や、市街にとどまっている武漢市民が差別される様子や、病床不足により仮設病院が次々建っていく様子や、感染症に対する友人の医師（複数人）の考察などが描かれている。メディア発信や公式の情報（政府発表の感染者・死亡者数など）だけではなく、非公式の情報、つまり著者が友人や知人から得た情報や各々の考察、推察も含まれていた。その情報には「プラスのエネルギー」を持つ情報と、「マイナスのエネルギー」を持つ情報の両方が含まれていたが、著者は情報発信を続けた。ここでいう「プラスのエネルギー」とは中国社会や政府の方針を肯定的に捉える楽観的な思考であり、「マイナスのエネルギー」とはその逆である。

そのことにより極左（中国では体制寄りの保守派が左翼）からの批判も受けたが、著者の日記に対する姿勢は変わらなかった。さらに著者は極左に対して、日記内で反撃している。特に、武漢での新型コロナ感染者数がピークを過ぎ落ち着いてきてからは日記における反撃の占める割合が大きくなっていった。

ネット検閲が厳しい中国で湖北省政府批判を行ったことには世界中から大きな注目が集まった。政府以外にも、政府系メディアや武漢市中心医院に対する批判も行っている。政府に対しては、発生初期の対応の遅れや情報の隠匿の可能性を指摘している。もっと早い段階で「ヒト－ヒト感染はない、予防も制御もできる」という誤った結論を撤回し、「ヒト－ヒト感染はある」と修正出来たのではないか、そのことをもっと早い段階で知っていたのではないか、情報秘匿をしていたのではないかと批判している。武漢市中心医院は武漢で最初に新型コロナが確認された病院であり、医療関係者に複数の死者を出した。また、新型コロナに関する告発を行った医師を処分した。このような行為に対して、政府と同様に情報秘匿の姿勢を批判している。

また、政府や武漢市中心医院の上層部が、責任をとるべき人が責任をとっていないことに対しても批判している。

一個人の日記がどうして世界各国で出版されるほどの注目を集めたかという疑問が生まれるかもしれない。当然のことながら、武漢が世界で最初に新型コロナ感染が爆発的に増えた都市であり、著者がその武漢でブログを投稿し続け、リアルな情報を発信していたという理由があげられるが、それだけではない。上記のような批判に伴い、中国国内から削除や遮断や批判にさらされながらも情報を発信し続けたからである。

印象的だったのは、2月24日の日記で「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」と記している

ところである。隔離のために養老院（日本でいう老人ホーム）から出なければいけない老人が出たというニュースを受けての一文である。この考え方には著者の作品の特徴である社会の底辺で生きる人々の姿を描いていることに通じるものがある。日本でも、路上生活者やネットカフェ宿泊者に対して定額給付金の支給が困難であるなど、社会的弱者に対しての新型コロナ関連の支援が行き届いているかは課題が残る。

著者は「個人の記録は微々たるもので全体を総括できないが、無数の個人の記録を集めれば、あらゆる角度からあらゆる過程の真相を明らかにすることができるだろう」と日記を投稿する理由を述べている。個々人の視野というのは決して広くない。著名作家である著者は一般人に比べ知人や友人も多く、得られる情報も幅広い、それでも一個人では限界がある。しかし、『武漢日記』と同様に封鎖された武漢での出来事を記録し続けた人は複数いる。未だWHOの国際的な調査チームによる調査が武漢では行われていない。もし、今後も武漢での調査が行われない場合には、『武漢日記』を含む各個人の記録が、封鎖された武漢の実体を明らかにしていくであろう。もちろん調査が行われた場合にも、それらの記録は実体を知る手助けになるであろう。

4月8日に武漢の封鎖は全面的に解除された。こちらはまえがき（4月13日記）に記されていることだが、「封鎖が解除された瞬間、ほとんどの市民の目には熱く光るものがあった」という。2020年12月10日現在、日本では過去最大の波である新型コロナ感染の第3波が到来しているところであるが、1日でも早く新型コロナ感染が落ち着き、それを嬉しく思える日が来ることを願う。